

# 旬の音色 魔法の響き

第56回大阪国際フェスティバル(朝日新聞文化財団、朝日新聞社、大阪国際フェスティバル協会など主催)が、まもなく開幕する。没後150年のロッシーニのオペラ「チェネレントラ」には、いまもっとも注目される若手歌手の小堀勇介、協園彩が登場。ベルリン・フィルの芸術監督を退任するサー・サイモン・ラトルは音楽監督を務めるロンドン交響楽団と来日。いずれも「旬」の音色を大阪・中之島のフェスティバルホールに響かせる。

## オペラ「チェネレントラ」王子役・小堀勇介

夢は古生物学者だった。恐竜の化石を掘りたかったのに、どういふわけか故郷の福島から国立音楽大学へ。弓道部で鍛えたムキムキの筋肉が役に立ったのかどうかはわからないが、いまも大注目のテノール歌手だ。ロッシーニを極める歌い手として、専門家も一目置く。風光明媚なリゾート地、イタリアのペーザロ。世界中から未来のスターが集まるこの地の「ロッシーニ・オペラ・フェスティバル」のアカデミーで学んだ。「ロッシーニの神様」と称される指揮者で音楽学者のアルベルト・



滝沢美穂子撮影

5月12日

## ロッシーニ極める 注目のテノール

ゼツダに見いだされ、「チェネレントラ」のカナダ公演でラミロ王子に抜擢された。ロッシーニといえは多作家で美食家、艶福家。20代半ばにして作曲家としての頂点を極めた人物だ。まさにセレブで、同時代に生きたベートーベンがうらやむほど才能にあふれていた。しかし死後はあまり見向きもされず、20世紀半ばに再び脚光を浴びる。「再発見」の最大の功労者がゼツダだ。ゼツダとの縁は2015年にさかのぼる。その年の大阪国際フェスティバルで、ゼツダは「ランスへの旅」(ロッシーニ作曲)を指揮した。来日中の名匠に歌を聴いてもらいたくて、ツテをたどって頼み込んだ。「30分なら」と返事をもらい、稽古場の大阪音楽大学へ。途中、近くのカラオケ店で発声練習をして臨んだが、反応はいまいち。「角が強すぎる。もっと柔らかく」と指摘された。翌16年、ペーザロで開かれたオーディションで再会した。「やっと来たか。待ってたよ」と歓迎されて、驚くやらうれしいうらやま。「僕のことを覚えていてくれて、感動しました」と振り返る。その後、オーストリアで本格的なヨーロッパデビューを果たす。大きな舞台で場数を踏み、声が変わったと実感する。「高音だけではなく、中音域も明るく、前へ飛ばすようになった」。ゼツダの教えがしみこんだ声に、まるでやかさと深みが増している。今作「チェネレントラ」で相手役のアンジェリーナを演じる協園彩とは、オペラ初共演。協園は、高校生のころからイタリア語を習っていたという。大学へ入る前には将来を見すえていた。「すごいですね。僕なんて思いつき。音大を目指したのもそうでした」。好対照の2人が共鳴しあい、みずみずしさがはじける。(谷辺寛子)

## 五輪でも大役 イギリスの顔

動向が注目的だったベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の芸術監督、サー・サイモン・ラトル。ベルリン・フィルの任期が2018年で切れるからだ。ふたを開ければ、世界的なマエストロを射

止めたのは、母国イギリスのロンドン交響楽団(LSO)だった。100年以上の歴史を誇る名門オーケストラが、音楽監督となったラトルとともに来日する。リパブル生まれのラトルにとって、自然な選択だったのかもしれない。英国立音楽院で学び、1980年からパームガム市交響楽団の首席指揮者に。以来、地方オケの一つだったパームガム市響の實力と知名度を大きく伸ばし、世界的なオケへ成長させたことは広く知られる。ベルリン・フィルへと飛躍したのは2002年。並み居る大物指揮者を退けての就任は話題を呼んだ。ラトルがLSOを初めて振ったのは1977年、22歳のときだという。2012年のロンドン五輪の開会式には、この組み合わせで登場し、イギリスの「顔」として大役を果たした。昨秋、音楽監督に就いた。ラトルはLSOについて、「ピンを少し触るだけで作動する、高性能のスポーツカーを運転しているように」と語る。これからの「走り」に期待したい。(谷辺寛子)



ロンドン交響楽団とサー・サイモン・ラトル(中央) ©Doug Peters

9月23日 ラトル&ロンドン交響楽団

## 第56回大阪国際フェスティバル (会場:フェスティバルホール)

■大阪4大オーケストラの響演 4月21日(土)午後4時(午後3時半からイベント) / 残席はS席8500円のみ▽大阪フィルハーモニー交響楽団(指揮:尾高忠明)▽関西フィルハーモニー管弦楽団(指揮:藤岡幸夫)▽日本センチュリー交響楽団(指揮:飯森範親)▽大阪交響楽団(指揮:外山雄三) / 協賛:朝日放送、サントリーホールディングス、竹中工務店

■ロッシーニ作曲・オペラ「チェネレントラ」 5月12日(土)午後2時 / 残席はS席1万2千円、A席8千円、学生席1千円▽指揮:園田隆一郎、演出:フランチェスコ・ペロット、ソリスト:協園彩(メゾソプラノ)、小堀勇介(テノール)、押川浩士(バリトン)、谷友博(バリトン)、光岡曉恵(ソプラノ)、米谷朋子(メゾソプラノ)、伊藤貴之(バス)、合唱:藤原歌劇団合唱部、管弦楽:日本センチュリー交響楽団 / 協賛:朝日放送、関電工、ダイキン工業、高砂熱学工業、竹中工務店、西原衛生工業所 / 後援:イタリア文化会館・大阪、日本ロッシーニ協会 / 協力:大阪芸術大学、堺市文化振興財団

■サー・サイモン・ラトル指揮ロンドン交響楽団 9月23日(日)午後2時 / パーンスタイン:交響曲第2番「不安の時代」

(ピアノ:クリスティアン・ツィメルマン)、マーラー:交響曲第9番 / S席2万9千円、A席2万4千円、B席1万9千円、C席1万4千円、D席9千円、BOX席3万4千円、学生席3千円。4月29日一般発売 / 協賛:朝日放送、京都銀行、大和ハウス工業、凸版印刷

■フレリー・ゲルギエフ指揮ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団 11月29日(木)午後7時 / プラムス:ピアノ協奏曲第2番(ピアノ:ユジャ・ワン)、ブルックナー:交響曲第9番 / S席2万5千円、A席2万1千円、B席1万7千円、C席1万3千円、D席8千円、BOX席2万9千円、学生席3千円。5月19日一般発売 / 朝日放送、京阪ホールディングス、パイエル薬品

◇チケット・問い合わせはフェスティバルホール(06・6231・2221)へ。



クリスティアン・ツィメルマン Christian Zimmler



Fanny Gergiev

## ヒロイン・協園彩 イタリアからの便り

この冬のイタリアは、あまり寒くありませんでした。このまま春を迎えるのかと油断していたら、2月の終わりに急激な冷え込みが。私の住むミラノも雪が降り、街の中心、ドゥオモの広場はロマンチックな雰囲気になっていました。

私はフリーランス。仕事をしていないときのオペラ歌手は何をしているのか。私はできるだけ自然の近くへ行き、友人や大切な人とシンブルに生きて、自分を取り戻す作業をします。家をきれいに料理をし、友人と語り世界を広げます。本を読み、瞑想して心地よくなる運動もします。

## 私たちの心つかむ 2人の純粋な魂

の、繊細です。人間はあくまでも自然の一部。シンブルに生きてみると、思いがけないところで、深い感動や人生を揺るがす出会いがあるかもしれません。「チェネレントラ」のアンジェリーナとラミロ王子のように。アンジェリーナはその名(Bibbiena)天使の通り、純粋な女の子。地位や富といったお仕着せにうんざりしているラミロ王子もまた、真実の愛を求めている。灰かぶり姿のアンジェリーナに出くわし、瞳の中のきらめきを見て恋に落ちるのです。出会いの場面に、ロッシーニは魔法のような美しい音楽をつけています。2人の純粋な魂が溶け合うよう。互いに人生の真実を追究してきたからこそ奇跡であり、私たちの心をつかむのでしょ。



滝沢美穂子撮影

わきそのあや 1988年、東京生まれ。東京芸術大学院をへてイタリアへ。2014年にミラノ・スカラ座デビュー。

人生はそんな魔法のような瞬間のためにあるのでは。運命の人に会わずとも、風の中にほのかに春を感じたり、大切な人とコーヒーを飲んだり。予期せぬ一瞬は、そんなときに訪れるのかもしれない。いま私はベローナで次のプロダクションの稽古中です。初めてこの地の劇場で演じた役がアンジェリーナでした。シンブルに生きる彼女に想いを巡らせつつ、魂で歌う日々。肌をなでる風に、切るような冷たさはありません。春はもうすぐそこです。